

深刻な「磯焼け」と藻場再生の取り組み



磯焼けによる藻場の喪失 水産業への影響

海藻類が減少・喪失する現象を「磯焼け」と呼び、近年、大槌町でも急激に増加しています。藻場の消失による影響は大きく、周囲の生態系へも変化を与えます。藻場に生息する生物は住処を失い、生物が住み着かない漁場では海産物もとれず、水産業へも深刻な影響を与えます。町のウニやアワビの水揚げ量を見ると、近年は減少傾向にあることがわかります。

ウニ・アワビの水揚げ量の推移

年	ウニ 水揚げ量 (kg)	アワビ 水揚げ量 (kg)
平成 21 年	7,010	11,998
平成 22 年	6,249	10,837
〃	〃	〃
令和 1 年	5,791	6,226
令和 2 年	5,209	5,969

また、周辺の海の環境が変わるとは大槌の豊かな海を将来の子供たちに残せなくなることにつながります。磯焼けは町民全体へ影響が出る問題としてとらえ、対策に取り組んでいかなければなりません。

大槌町藻場再生協議会を発足

磯焼けの状況へ危機感を抱き、ボランティアダイバーら有志による磯焼け対策活動が行われてきましたが、令和3年4月、藻場や磯根資源の維持・回復などを目的として、町内の漁業関係者を中心に「大槌町藻場再生協議会」が発足しました。



磯焼け対策活動は主に冬の海の中、ダイバーたちによって行われる

生協議会」が発足しました。船越湾や大槌湾内の海域でダイバーが潜り、海藻を増やすための種苗を設置する作業や過剰に増えて海藻を食べ尽くしてしまうウニの駆除などの磯焼け対策活動を実施しています。

この活動を最も集中的に行うのは冬場。会長を務める芳賀光さんによると「冬場になるとコンブなどの海藻類が胞子を出す時期になる。その時期にしっかりと活動する事が重要で、冬場以外はそれに向けた準備」とのこと。冬場の水温は一桁台。体力も奪

われるため、ダイバーにとって非常に大変な作業です。こうした活動が実を結び、少しずつ再生した藻場が確認されるようになっていきます。

藻場の危機を知ってもらい 海を守る活動を広げたい

磯焼け対策活動開始当初から参加する佐藤寛志さんは、東日本大震災後にボランティアダイバーとして瓦礫撤去などを実施。「当時から復興に向けて漁師さんたちと一緒に活動し、信頼関係を築いてきた。今大槌の海

が新たに抱える磯焼けの問題に、共に関わることができて嬉しい。今後にも共に藻場再生の力になっていきたい」と語ります。芳賀さんは「まずは今海で起きていることを町の人たちにも知ってもらいたい。漁業者さんたちはこの活動をすごく理解し協力してくれている。豊かな海を守るため、多くの人に関わってもらえるように活動していきたい」と意欲を見せます。豊かな海を未来につないでいくためにも、藻場再生について私たちも学んでいきましょう。

NPO法人 三陸ボランティアダイバーズ
代表 佐藤 寛志 さん (写真右)

花巻市出身。ダイビングショップ「みちのくダイビング グリアス」(大船渡)オーナーで、マーシャル諸島やタイなど世界各地での潜水経験も豊富。震災後に三陸ボランティアダイバーズを立ち上げ、大槌町内でも海底清掃や瓦礫調査などを実施した。三陸の海の現状をメディアを通して情報発信しており、「くまさん」と呼ばれ多くの人々から親しまれている。



大槌町藻場再生協議会
会長 芳賀 光 さん (写真左)

吉里吉里地区出身。新おおつち漁協青年部長も務める。大槌町近海の磯焼けの現状に危機感を感じ、独自でダイビング免許を取得。大槌町磯焼け対策事業開始当初からダイバーとして活動に参加する。協議会発足後は会長として磯焼け対策活動を牽引する。

再生された藻場

再生したエリアが増えているが、保全していくためにはさらなる活動や人手が必要



スポアバッグ(種苗袋)の設置

岩礁にボルトを取り付け種苗袋を設置。袋から胞子を出し、岩礁に根付かせるためのもの



痩せウニの駆除・移植

増えすぎたウニは、海藻を食べ尽くしてしまうため、手作業で潰したり、移動させたりする



ダイバーによる磯焼けエリアの状況調査